



あなた

今日も寝坊したわよね

図書室の掃除をして帰るように、以上

図書室

ああ…

俺の名前は田中健司  
18歳の高校生だ

今日は寝坊した罰として  
図書室の掃除を担当の  
宮村恭子先生に命じられ  
今まさに実行しているところだ

実は俺は単純に  
寝坊したわけではない

宮村先生に怒られるために  
わざと寝坊したのだ

今日の宮村先生も  
よかったなあ…

本来なら理解のできないことだが  
俺にとっては至福の時間なのだ

なぜなら俺は  
宮村先生のことが好きだからだ

あのクールな性格に  
きつそうな目

そして抜群のスタイル

俺の性癖にぶっささりで  
非の打ちどころのない  
まさに俺の理想そのままだ



宮村先生のお叱りタイム  
という至福の時間は  
終わったので：

後は面倒な掃除を  
終わらせるだけだ

なんだこれ……？

一冊だけ明らかに  
異彩を放つ本に  
俺の目は  
くぎ付けになった

この本棚には  
図書委員が選んだ本しか  
置かれていないはずだ

つまりこの本は  
明らかにおかしい  
ということになる

方法は憑依したい  
人間の手を握って  
ボディジャック！  
と叫ぶ。  
元に戻りたい場合は  
抜け殻の手を握って  
ボディバック！  
と叫ぶ！

おいおい

「この本を読んだ者は  
自分が望む人間に  
憑依することができる。」

気になる……

冗談だろ？  
憑依だなんてそんな……

もし、もし本当に  
宮村先生に  
憑依出来たら……

俺はこの本に書いてあることは

嘘だと思っている

だけど、もし

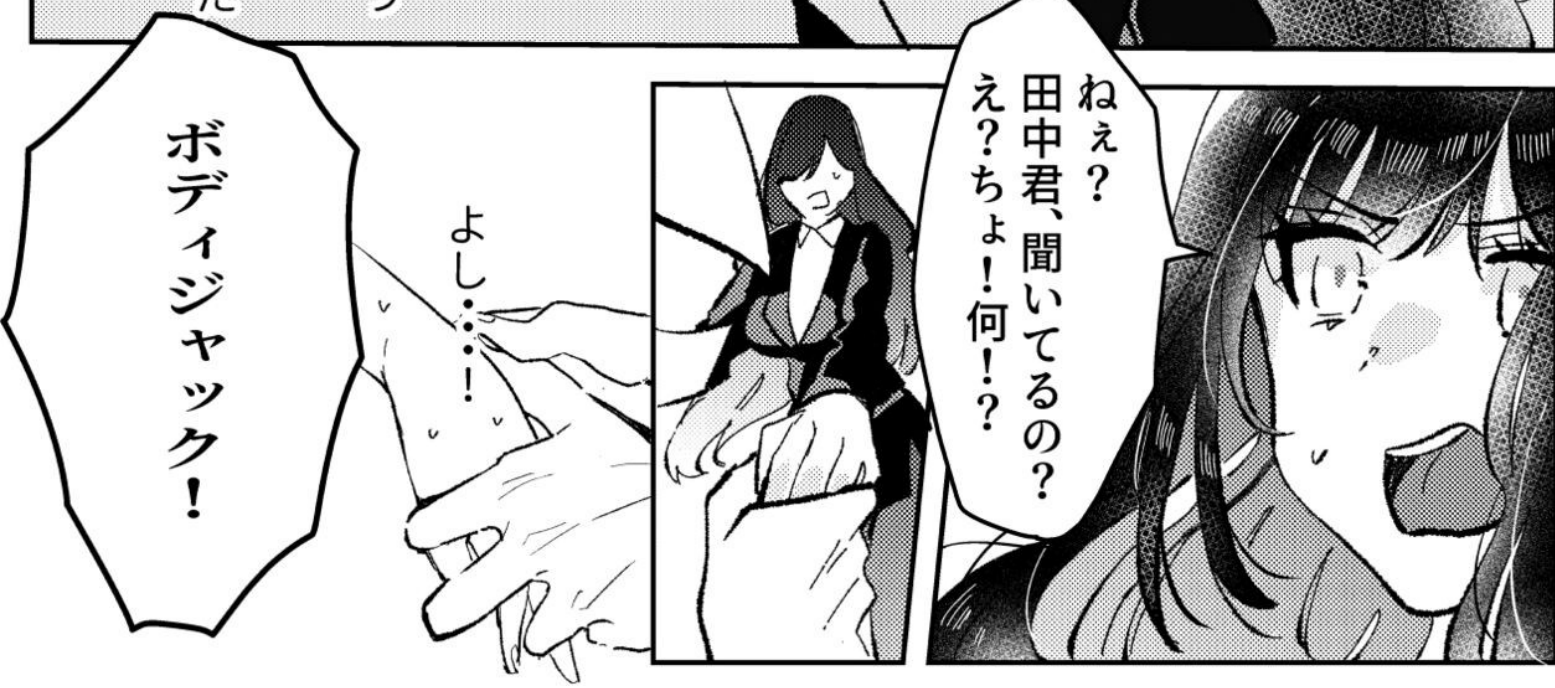
本当に憑依出来たらという

期待が俺の心にはあった

そんなことを言いつつ  
俺は最後まで本を読み終えた

今日は金曜だし  
来週試してみるか……！









んん…  
何が起きたんだ…

そうだ、職員室で  
宮村先生に怒られているときに

憑依の方法を試して…  
ああ、ガセだったんだな

なんだか  
足の辺りが  
スウスウする  
ような気が…

え！？  
胸があるぞ…  
しかも結構大きいような…

手の感触も違う  
それに  
ストッキングを履いている…

これって  
まさか…！

鏡はどこだ…

あった！

パッ





これは本物だ…  
間違いない！

俺は次に  
股間に手を伸ばす

ない！  
俺のあれがないぞお！

はーん  
そういえば俺の体は  
どうなったんだろう？

そうか、俺が  
宮村先生の体に憑依したから  
俺の体は抜け殻状態なのか…

今の学校には俺と宮村先生しかいない  
つまり今何をしようと  
それを止める者は誰一人いない

お楽しみと行くか…！

そういえば保健室には  
大きな姿見があったはずだ  
そこで楽しむのが一番だろう

わう

本当に宮村先生に  
憑依できたんだなあ

そこにはスーツを着た美人の女性がいた

胸の膨らみや、股間にあるはずのものが  
ないことで本物の女性だと実感する

俺は姿見の前で  
先生の着ているスーツ  
をゆっくりと脱いだ

お、おお……!



宮村先生って  
紫色の下着付けてたのか！

普段の先生からは  
想像できないセクシーな下着だ

そんな姿の自分を見て興奮してしまったのか  
どんどん体が熱くなっていくのが分かる

先生……  
だめだ……  
もう我慢できない

俺は我慢できず

ブラのホックに手を回す

ドクッ

はぁっ

はぁっ

はぁっ



すげえ……  
スーツの上からでも  
大きかったけど、  
こうやってみると  
かなり大きいんだなあ

自然と宮村先生の胸に手が伸びる

ん♡  
おっぱいを揉まれるって  
こんな感じなのか

夢にまで見た

宮村先生のおっぱい、

今それを自分が  
揉んでいるのだ

宮村先生の手で

俺はその勢いのまま  
パンティーに手をかけ

脱いでいく



これが  
宮村先生の裸…

もう我慢の限界だった

俺は欲望のままにオナニーを始めた

鏡を見るといつもはクールな先生が  
全裸でオナニーしている

イクッ！  
宮村先生の！  
俺のおまんこ！

宮村先生に憑依した時のために  
準備していたものがある

まだ終わりではない

はぁはぁ……  
これが女として  
いった感覚か……はぁ……



俺は鞆の中から  
とある衣装を取り出した  
それは黒いエナメル  
ボンテージ衣装一式だ

レオタード、コルセット  
ガーターベルト、チョーカー  
ロンググローブ、ロングブーツ  
がセットになっている

さあて俺の夢を  
叶えさせてくれよ宮村先生





すげえ...  
これ  
本当に宮村先生なのか...?

まるでSMの女王様のようだ



これが俺で  
この美しい女性が  
宮村先生だなんて  
信じられない

俺は鏡を見ながら  
しばらく自分の姿を  
堪能していた

さてと  
そろそろ  
本番と行こうか





職員室

カキッ

カキッ  
俺は自分の抜け殻に近づき  
ズボンを下ろし  
ちんこを露出させた

うわ  
でっか...

ハヤミ

ハヤミ



だが  
まだ足りない  
気がする  
女の本能が  
言っている  
のだろうか

勃ってきたぞお...

ちよつと抵抗あるけど  
口でもしてみるか



シュワッ

ハヤミ









それは宮村先生の体で  
ボンテージ衣装を着て  
セックスをすることだった

宮村先生の、俺のおまんこは  
さっきのオナニーの余韻で  
すでに準備はできている

挿入するには  
十分すぎるほど濡れていた



それじゃ早速やるかあ…

ぬち…

俺はレオタードの股間部をずらし、  
腰を落として一気に奥まで入れた

あゝあゝ！

入ってきたあ！  
おおおおん！！！！

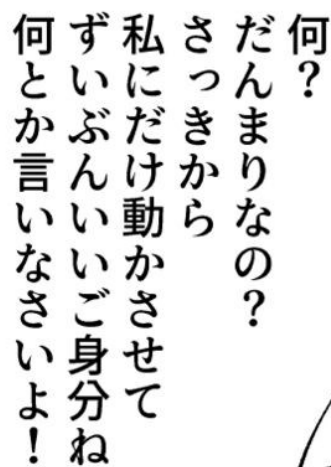
その瞬間  
今まで感じたことのない  
快感が体中を駆け巡る

パンッパンッという音が  
誰もいない職員室に響く

その音を聞くとびに  
興奮が高まっていくのを感じた









私、本当は  
田中君のこと  
好きだったのよ？

だからこんな女王様みたいな  
恰好までしてあげたのに……

何？  
だんまりなの？

もういいわ  
あなたは私の体だけが  
目的だったってことね

それなら  
女王様らしく  
あなたにお仕置き  
してあげるわ

黙ってないで  
喘ぎなさいよ！  
ほら！ほらあ！！

へえ？  
これでも  
動じないのね

なら！



はぁっ



俺はお腹に力を入れ  
膣を思いつきりしめた

よほど気持ちよかったのか  
抜け殻の股間が熱くなり  
膨らんだのを感じた

ビーン

宮村先生に  
成り切りながら  
腰を振り続ける

縦、横、上下、更には  
膣を絞めたり  
緩めたりしながら抜け殻を  
攻め立てていった

当たり前だが  
抜け殻の自分を  
いくら煽っても  
言葉は帰って来ない

だが宮村先生の口調で自分を煽っていると  
どんどん興奮が高まっていった

抜け殻もこれ以上ないほど  
勃起したその時だった

あら？手ごたえありね  
そうやって素直に  
反応すればいいのよ

はぁ♡

ん

あん♡

はぁ♡

ん

はぁ♡



おまんこの一番奥に  
ちんこが当たった瞬間  
今までにない快感が  
電流のように体の中を  
駆け巡った

ああっ！  
これやべえ！  
気持ちよすぎるう！

俺はもう二度同じ場所を  
めがけて腰を下ろした

さっきと同じ感覚が  
また襲ってくる  
俺はそこに狙いを定め  
何度も出し入れを繰り返した

ゴッ  
ゴッ

ゴッ  
ゴッ

ぽん  
ぽん  
ぽん

おん  
おん  
おん









そろそろいいか

最高の思い出になったよ  
宮村先生

ずる

あ、そうだ

これでよしと  
さて  
片付けるか

ボディバック！

あぁん

イイ！

ちゅ♡

ちゅ♡

鍛えられたJDの  
体さいこお！

あっ♡ふ♡  
む♡♡

俺はあれからも  
いい体の女性を  
見つけては憑依し  
オナニーをしていた

今回はジムで  
知り合った  
女子大生だ

43



彼女の体は筋肉質で  
引き締まっでいて  
とてもエロい

おっぱいも  
かなり大きい方だ

あーっ  
あーっ  
あーっ

あーっ  
あーっ  
あーっ

あ！  
イク！  
イクウウウ！

こうして今日も  
女体で絶頂を迎えた：

オナニーは  
最高に気持ちいい  
だがいくら女体に憑依して  
オナニーしても俺の心は  
満たされなかった

やっぱり俺には…

宮村先生

田中君?

どうしたの?

今日はあなたのこと  
呼んでいないのだけれど

ねえ  
あなた人の話聞いてる!?  
え! ちょ!

ああ  
やっぱり俺には  
この体じゃない

グイ





宮村先生…

すいません  
やっぱ俺には  
先生しかいないです

はあ？ちよつと何言つて…

ボディジャック！

ふふふ

やはり  
好きな人の体が一番だ  
という事に俺は気づいた

様々な女性に憑依したが  
やはり宮村先生の体で  
得られたような快楽を  
得ることはできなかった

俺にはこの体、宮村恭子の体が一番なのだ





さあて、何をして楽しもうかな

俺は宮村先生が普段しないような  
不敵な笑みを浮かべてそうつぶやいた